

「おいしいお米の向こう側」

喜多方市立高郷中学校 三年 和田 雅子

皆さんは農家・農業と聞くと、どのようなイメージを持ちますか？「農業って大変そう、農家ってきつそう。」そう言われると、私は少し寂しくなります。私は米農家の家に生まれ、農業の大変さとその中にある喜びの両方を、ずっと見てきたからです。

農業には確かに苦労がたくさんあります。例えば、苗箱を並べる作業。これは四十度近くになるハウスの中で行います。何百枚もの苗箱を一つ一つ運び、並べていく作業は本当に辛くて、全身汗だくになります。私も年齢が上がるにつれ、重い作業を任されるようになりました。正直なところ全然楽しくないと感じたり、もうやりたくないと思ったりすることもありました。

ある時両親に、「米作りの何が楽しいの？」と聞いたことがあります。二人は少し考えてこう言いました。「すごく大変だけど、秋になってお米ができて、みんなにいいって言うってもらえたらそれだけで報われて、よく頑張ったなって思えるんだ。それが何より幸せなんだよ。」

今では、私もその気持ちがわかります。苗が少しずつ大きくなっていくのを見ると嬉しいし、苦労したぶん稲刈りの時は達成感があります。何より休憩の時のアイスはたまらないです。汗をいっぱいいた後だから体にしみわたり、「ああ、頑張って良かった。」と心から思えます。それは働いた人だから味わえる特別な気持ちです。家族で笑いながら働ける時間も、私にとっては大切な宝物です。

だからこそ私は「農業って大変そう」という言葉の向こうの「楽しさ」をもっとみんなに知ってほしいのです。確かに簡単ではないし見つけるのも難しいかもしれませんが、私も、私がそうだったように必ずあるはずです。それに気づけた時、もっと頑張ってみようという気持ちになれるのではないかなと思います。

そして、私はもう一つ大切なことに気づきました。それは、農業は一人ではできないということです。両親は、よくこう言います。「私たちだけだったら、こんなにおいしいお米は作れないよ。」

実際、うちには昔から来てくれるお手伝いさんたちがいます。みんなそれぞれ別の仕事があるのに、忙しい時期になると手伝いに来てくれます。他にも、土を運んでくれる人、肥料を届けてくれる人、壊れた機械を直してくれる人、誰か一人でも欠けたら、米作りはうまくいきません。そして、米を食べて「おいしい」と言ってくれる人もまた、私たちにとって、とても大切な支えです。

最近、米の値段が上がったというニュースを聞くようになりました。毎日の苦勞を思い、私は「やった」と喜びました。父や母も嬉しそうな顔をしていました。けれど同時に、値段が上がれば、食べたくても買えない人が出てくると聞いて、心がモヤモヤしました。毎日食べるお米が当たり前じゃなくなる。そんな社会にはなってほしくないと思いました。

今、農家を増やせばいいという声もあります。でも私は、作る人だけでなく、それを支える人が増えることが、未来の農業につながるのではないかと考えています。それは農業の仕事をするだけでありません。作ってくれた人に、「ありがとう」と伝えること。食べ物を大切にすること。そんな気持ちや行動も立派な支えです。

これからもおいしいお米を食べ続けていくために、私たちにできることはたくさんあります。食べ残しをしない、一粒一粒を大切に食べる。米作りの楽しさや大変さを、体験を通して知ってもらう。そうすれば、米を大切に思う人がもっと増えるはずです。米を作る人、その人を支える人、そして米を食べる私たち。みんながつながっているからこそ、今日もおいしいご飯が食べられるのです。

私はこれからも農業の事を大切に思いながら生きていきたい。そして、今度は誰かを支える人になって、おいしいお米の向こう側にあるたくさんの方の努力を伝えていきたいです。

私のふるさとの農業が、これからもずっと続いていくように。うちの自慢のお米を一人でも多くの人に味わってもらえるように。私はその一步を踏み出していきたいと思っています。